

はまな

静岡県水産試験場浜名湖分場

Shizuoka Prefectural Fisheries Experiment Station Hamanako Branch

No.506

2004年5月

〒431-0211 静岡県浜名郡舞阪町舞阪5005-1

TEL 053-592-0139 FAX 053-592-0906

http://www11.ocn.ne.jp/hamanako/

E-mail: suishi-hamanako@hq.pref.shizuoka.jp

挨拶

新任のご挨拶

研究レポート

最近の天竜川の濁りについて

漁況

平成15年の浜名湖漁獲統計

花博体験学習「水産教室」予定

目 程	内 容
5月 1日(土)	袋網漁業
5月15日(土)	アサリ漁業
6月19日(土)	アサリ漁業
7月 3日(土)	ウナギ・アユ養殖
7月17日(土)	遠州灘の漁業
7月31日(土)	遠州灘の漁業
8月14日(土)	袋網漁業
8月28日(土)	ウナギ・アユ養殖

*各回10時30分頃から、自然観察園にて1時間程度

CONTENTS

挨拶	新任の御挨拶	影山佳之	1
	浜名湖心残り問答	幡谷雅之	1
研究レポート	最近の天竜川の濁りについて	上村信夫	2
漁況	平成15年の浜名湖漁獲統計	小泉康二	7
	トラフグの放流効果は？ ～平成15年度漁況結果より～	小泉康二	10
	平成15年度シラスウナギの採捕結果	飯沼紀雄	11
報告	ウナギ及びアユ養殖における魚病被害状況（平成15年）	吉川昌之	12
普及のひろば	岡山県における漁場改良の試み ～平成15年度巡回教室講演～	上村信夫	15
	アオノリの天敵を味方に・・・	小泉康二	17
ひとつこと	混入物があってもアオノリが好き！	松浦玲子	18
紹介	平成16年度人事異動及び業務分担		19
記事	分場日誌		20
	弁天島の気象海況		21
巻末・写真集		22



【表紙の写真】

いよいよ国際園芸博覧会「浜名湖花博」が始まりました。水産試験場としても県漁業士会西部支部が主体となり、花博会場で「水産教室」を全8回にわたって実施します。採貝漁業やウナギ養殖など浜名湖を代表する漁業について、実際の漁具や漁獲物を目の前にして、漁業者の方々の生の声を聞き、漁業にふれあうことができる趣向になっています。「水産教室」を目当てに、みなさんもぜひ「浜名湖花博」に出かけてみませんか。[撮影：平成16年5月1日、第1回水産教室にて。漁業士から袋網の漁獲物について説明を受ける参加者]

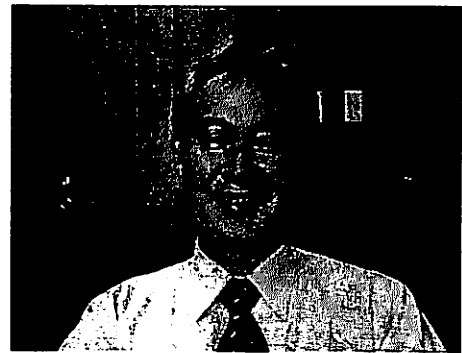
新任の御挨拶

影山佳之

このたび、幡谷前分場長の後任として、分場長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

私にとりまして初めての浜名湖分場勤務であります。これまでは焼津の水試本場や伊豆分場などに勤務し、主に漁業資源に関する試験研究に取り組み、このうち県西部に関係した仕事としては、遠州灘におけるヒラメ・ウシノシタの生態調査や人工魚礁に関する調査、トラフグの生態調査や種苗放流などを担当してまいりました。

浜名湖分場の業務は、ウナギ・アユの内水面養殖、アユを中心とした河川漁業、アサリ、クルマエビ、ガザミ等の湖内漁業、カキ・ノリ養殖、トラフグの栽培漁業、赤潮等の環境保全など幅広い分野にわたっています。今後の分場業務を進めるに当たり、漁業者の方々を始めとして多くの関係者の皆様の御指導・御協力を得て、試験研究の立場から浜名湖の恵みが末永く利用できるよう、分場スタッフと力を合わせ努力してまいりたいと考えております。



本年は国際博覧会である「浜名湖花博」が開催されており、多くの人々の目が浜名湖地域に注がれています。“花と樹木”だけでなく浜名湖の恵みである“魚”を広く知ってもらう良いチャンスです。現在の分場は浜名湖体験学習施設ウォットを併設するなど開かれた試験研究機関としての働きも大いに期待されております。浜名湖分場としても地域の水産物や浜名湖の環境保全などのPRの一翼を担っていきけるよう努めていきたいと思っております。

今後の分場業務の推進への皆様方の御指導・御協力を重ねてお願いし、新任の御挨拶といたします。

浜名湖心残り問答

幡谷雅之

＜噂で聞いたけど、あんた今度転勤なんだってネ。＞

＜ええ、そうなんですヨ。役人の一生は「はからずも」で始まり「大過なく」で終わるなんていいますが、定年目前に「はからずも」浜名湖を去ることになっちゃって。＞

＜今回は何年勤めたんだっけ？＞

＜2年でした。浜名湖分場は都合10年になります。＞

＜それじゃあ、さぞ感慨深いでしょう。＞

＜ええ、県に採用されて初めての職場だもんで、思い入れは人一倍大きかったですね。まあ、こ

の2年間ひとまず「大過なく」分場長を勤めることができたのは、皆さんの暖かい御支援のおかげですよ。＞

＜この2年間、分場ではいろいろな問題が起こっていたようですね。＞

＜毎日何かしら問題が起こっていたような気がします。水産の最前線で、バラエティに富んだ、とても緊張感のある職場でした。でも、2年前に引き継いだ時からのいろんな懸案事項が未解決のまま、次々と新しい問題が起こり、それらを先送りにして転勤していくのは、心残りでもあり、ちょっぴり後ろめたい気もします。＞

<懸案事項ってどんなことです。>

<まず第一に、浜名湖の環境変化と漁獲量の減少の話ですネ。去年はマダコの異常発生があったりして、エビ・カニ類の漁獲量が激減しました。生物相がずいぶん変わりましたネ。タチウオや大きなヒラメが獲れるなんて、昔の浜名湖じゃ考えられないことですよ。>

<新聞でも見ましたけど、塩水化が進んでいるということですか。>

<ええ。これは、言ってみりゃ自然界からの「イエローカード」じゃないですか。今のうちに何とか対策を立てないとね。まず土木や環境サイドとの議論を早急に始める必要があります。>

<養殖業界でも最近は何サビとかトレビリとか、騒いでいますね。>

<トレーサビリティですか。トレーサビリティというのは生産履歴を追跡できるシステムのことで。平成13年の牛のBSE騒ぎ以来、国民の食品安全性への関心が年々高まり、水産物とりわけ養殖魚の安全性の確保が厳しく求められるようになってきました。また、薬事法の改正により、未承認医薬品の使用が禁止されるなど、ただでさえ苦しい本県のウナギ・アユ養殖経営は一層の試練を強いられています。>

<要するに、消費者に安全・安心な食べ物を提供するってことですか。時に、ウナギといえば、去年はシラスウナギまでの人工飼育が初めて成功したんだってね。>

<成功したのは養殖研究所というところなんですけどね、画期的なニュースでした。ウナギ種苗生産研究は我が社でも40年以上もやっているんですが、なかなかいい成果が出ていません。成

果の出ない研究はどんどん切り捨てられるご時世ですから、もうこのへんで何とかしなきゃなりません。深層水の利用など、大胆な発想の転換を迫られています。>

<そういえば、体験学習施設の「ウォット」のことなんですか…。>

<それなんですネ、これまで管理運営を委託してきた舞阪町商工会から委託辞退の強い申し入れがあり、紆余曲折(ウキョクセツ)の末、結局今年度は静岡県漁業振興基金が受託することになったんですよ。>

<へえそんなことがあったんですか。>

<昨年末に入場者数が30万人を突破して、今年はお存知のとおり「花博」で県内外から沢山のお客さんが来ると期待されています。委託先は変わってもウォットの職員は変わっていませんので、今まで通り御愛顧の程お願いします。>

<ところで、この「はまな」のことだけど、去年から表紙にカラー写真を使ったりして、面目一新ですね。>

<これまでの月刊から季刊にするに当たっては賛否両論、侃々諤々(カンカンガクガク)あったんですが、切りの良い501号から思い切って現在のスタイルに変えました。まだまだ、「新はまな」はしっかり定着していませんので、生みの親としては先々とても心配です。皆様の叱咤激励(シツゲキ)をお願いしますネ。>

<分ってるヨ。心配すんな。最後に何か言い残すことはないかい。>

<それでは一句。

桜散り 心残りの 別れかな

いろいろお世話になりました。また、いつかお会いしましょう。> (前分場長)

研究レポート

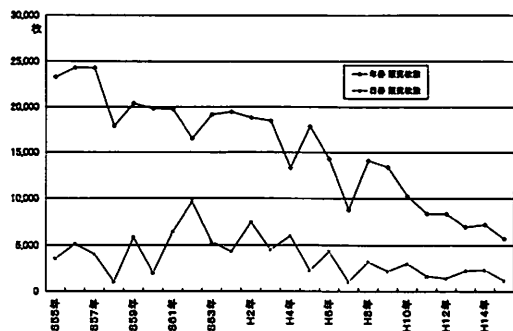
最近の天竜川の濁りについて

上村信夫

天竜川は昔からアユの遡上量が多く、また、友釣りの他に餌釣りも認められているため、餌釣りを中心とした釣り客が多い川でした。しか

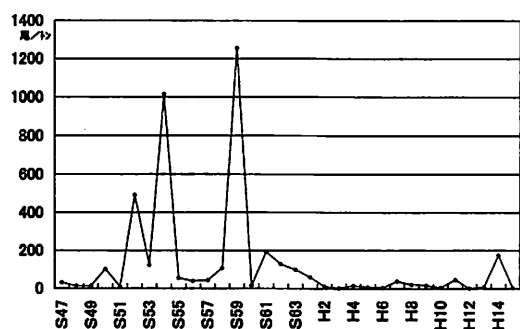
し、近年では入漁者数が大幅に減少し、入漁料収入が減少して漁協経営にも支障を来しつつあります。

第1図に天竜川漁協における年券、日券販売枚数の推移を示しました。現在は昭和55年当時の25%程度となっていますが、平成4年頃からは特に減少傾向が顕著になっているようです。同漁協では入漁者数減少の理由は、主にアユ資源量が減少してアユ釣りの魅力が失われたことにあると考えています。



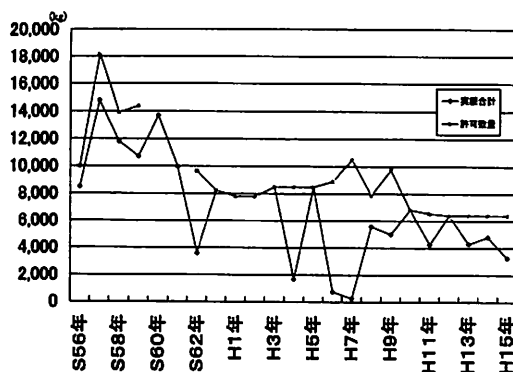
第1図 天竜川漁協における年券、日券販売枚数の推移

第2図に天竜川におけるアユ再生産状況を示す指標として、天竜川中流域における単位水量当たりアユ流下仔魚数の年間最大値の推移を示しました。各年の調査間隔が1週間から10日位あるため、必ずしもアユ流下仔魚数のピークを捉らえきれているとは言えませんが、概して近年は低レベルで推移しています。



第2図 天竜川中流域における単位水量当たり流下仔魚の年間最大値の推移

第3図に天竜川への稚アユ遡上状況を示す指標として、天竜川河口域における河川放流用稚アユ採捕量の推移を示しました。昭和58年には採捕許可数量約18,000kgに対し、15,000kg近い採捕実績(約80%)がありました。その後採捕許可数量は徐々に減少して平成15年には6,400kgとなっています。特に、昭和62年、平成4、6、7年には採捕許可数量を大きく割り込んでい



第3図 天竜川河口域における稚アユ採捕量の推移

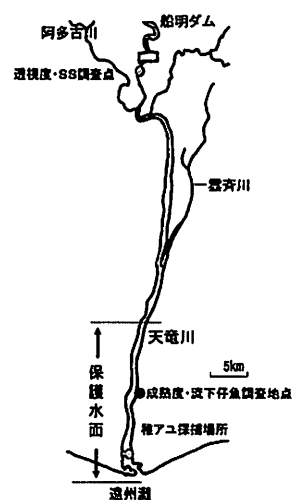
す。近年では、採捕許可数量6,400kgに対し採捕実績は50~100%程度で、許可数量を割り込む年も多くなっています。

以上二つの指標から、近年天竜川のアユ資源量が減少していることがわかりますが、同漁協ではその原因は、最近の天竜川の濁りの強さ、濁り期間の長期化にあるのではないかと考えています。

そこで、それらの因果関係を探るべく、平成12年11月から同漁協前の天竜川(第4図)で毎朝、水の濁りを表す透視度の観測を続けています。また、13年2月からは透視度に加えて濁りの量を表すSS(懸濁物質)の観測も行なっています。今回はこれらの観測データをもとに、最近の天竜川の濁りの状況等についてお知らせします。

平成13、14及び15年の1~12月までの透視度、SS、春の天竜川河口域での稚アユ採捕量、秋の天竜川中流域でのアユ流下仔魚数、そして気象庁天竜測候所で観測された降雨量をそれぞれ第5、6及び7図に示しました(SSが190mg/Lを超える場合はグラフ上では190mg/Lとして表示し、その横に数値を記しました)。

透視度については、濁った状態の目安とされ



第4図 天竜川保護水面(河口から上流16.4kmに至る区域)

る30cm以下の出現状況に、SSについては天竜川に課せられている環境基準（SS25mg/L以下=この値を超えるとアユが忌避行動を起こし始めるとされる）以上の出現状況に注目してみました。

1. 13年度の状況（第5図）

(7)透視度

濁りの強い透視度30cm以下の値の日は、2月下旬～3月下旬（26日間）、6月下旬（12日間）、そして、8月下旬～11月下旬（100日間）に長期間出現しました。特に8月下旬～11月下旬においては、8月下旬、9月中、下旬に透視度10cm以下の日が頻繁に出現しました。13年における透視度30cm以下の観測日の出現割合は全観測日の37%にのびました。

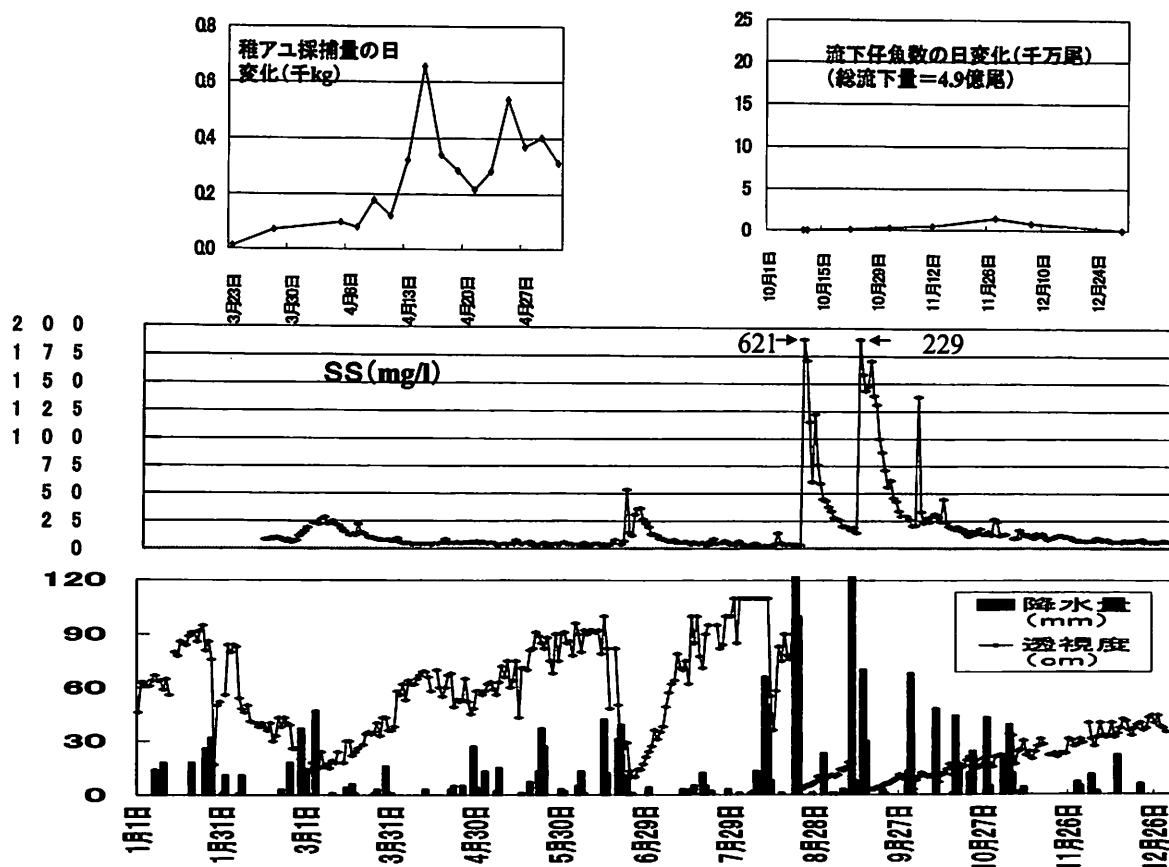
(4)SS

懸濁物質の多いSS25mg/L以上の日は、3月上旬（5日間）、6月下旬（7日間）、8月下旬～9月上旬（14日間）、9月中旬（19日間）、10月上旬（10日間）に出現しました。13年におけるSS25mg/L以上の観測日の出現割合は15%でした。

(ウ)アユの状況

春の天竜川河口域における稚アユは、4月中旬以降を中心に許可数量6,400kgに対し約67%の4,291kgが採捕されています。

秋の流下仔魚数は少なく、時期も遅れました。この年の10月12日に投網で漁獲された親アユの全長は129mmで、例年の産卵初期に当たる時期の親アユとしては成長の遅れが目立ちました。



第5図 船明ダム下流域の降水量、透視度、SSの推移とアユの状況（H13年）

2. 14年度の状況（第6図）

(7)透視度

濁りの強い透視度30cm以下の値の日は、1月下旬～3月下旬（60日間）、7月中旬～8月上旬（25日間）に出現しました。14年における透視度30cm以下の観測日の出現割合は24%でした。

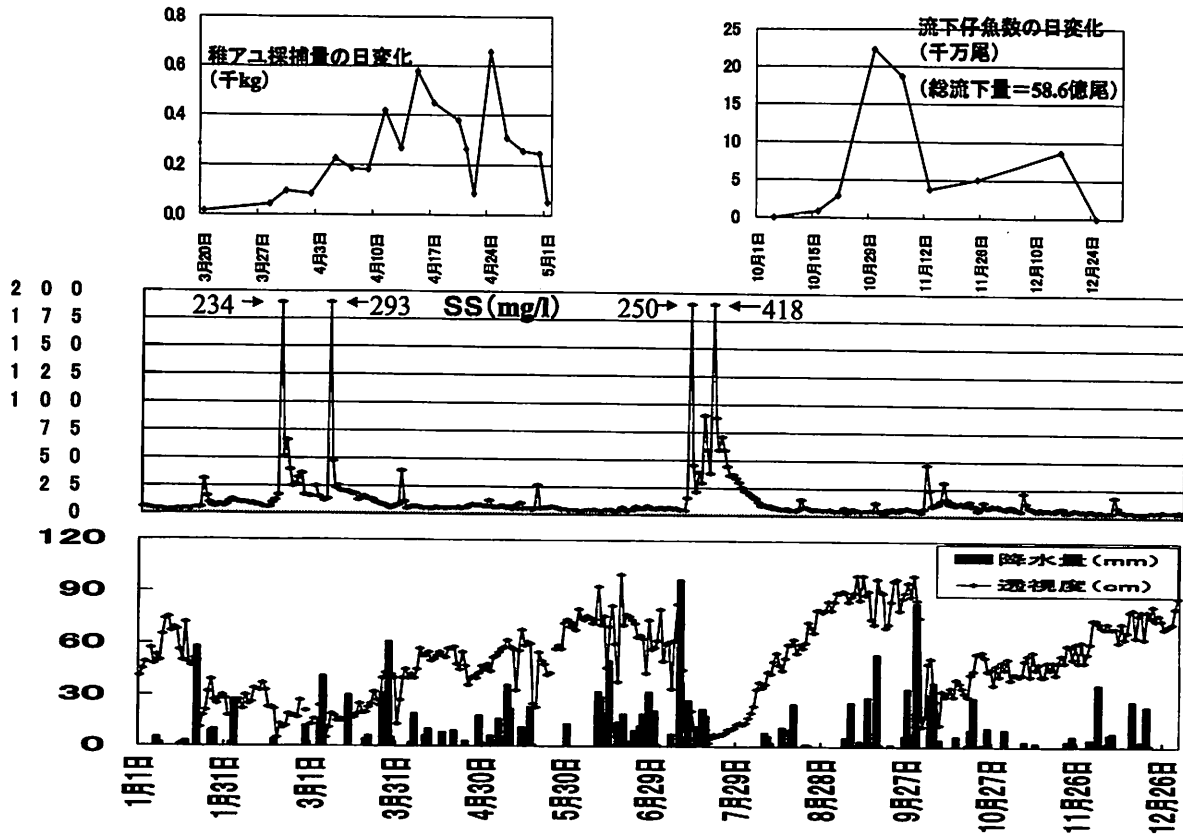
(4) SS

懸濁物質の多いSS25mg/L以上の日は、2月中・下旬（8日間）、3月上旬（4日間）、7月中・下旬（19日間など）に出現しました。14年におけるSS25mg/L以上の観測日の出現割合は10%でした。

(ウ)アユの状況

春の天竜川河口域における稚アユは、4月中旬以降を中心に許可数量6,400kgに対し約75%の4,800kgが採捕されています。前年秋のアユ仔魚の流下状況が悪かった割には比較的好調でした。

10月25日及び11月8日に投網で漁獲された親アユの尾叉長は、それぞれ164mm、166mmで、遡上後のアユの成長も順調だったようです。そして、秋の流下仔魚数は近年に近く大量でした。



第6図 船明ダム下流域の降水量、透視度、SSの推移とアユの状況 (H14年)

3. 15年度の状況 (第7図)

(ア)透視度

濁りの強い透視度30cm以下の値の日は、3月上旬～下旬 (20日間)、4月下旬～5月下旬 (31日間)、7月中旬 (8日間)、8月上旬～9月上旬 (29日間)などに長期間出現しました。さらに、15年8月上旬～下旬には透視度は10cm以下まで低下し、それが20日間続きました。15年における透視度30cm以下の観測日の出現割合は35%でした。

(イ)SS

懸濁物質の多いSS25mg/L以上の日は、3月上旬 (10日間)、4月下旬～5月中旬 (23日間)、8月上旬 (21日間)などに出現しました。環境基準値の10倍以上の値もたびたび出現し、その時には基準値以下に回復するまで長期間を要しました。

(ウ)アユの状況

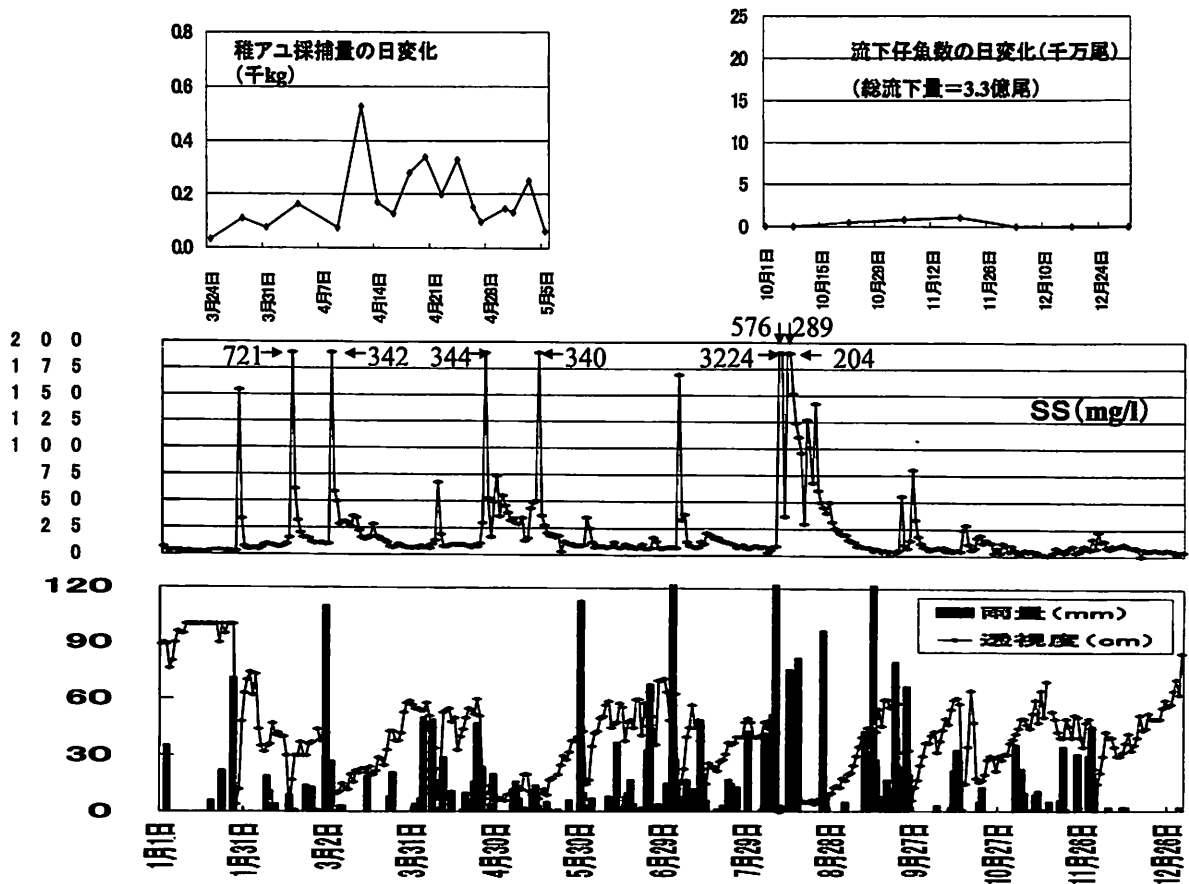
春の天竜川河口域における稚アユは、許可数量6,400kgに対し約51%の3,258kgが採捕されています。前年秋のアユ仔魚の流下状況が良かった割には不調で、特に4月中旬以降が不調でした。

秋の流下仔魚数は少量でした。この年の10月3日に投網で漁獲された親アユの尾叉長は123mmで、例年の産卵初期に当たる時期の親アユとしては成長の遅れが目立ちました。夏期の成長が遅れ、その結果が産卵量の減少などをもたらし、最終的に秋の流下仔魚数が減少したものと思われます。

4. 濁りの原因等

(ア)透視度とSSとの関係

透視度30cm以下になった時には当然のことながらSS値が高くなっていますが、透視度30cm以



第7図 船明ダム下流域の降水量、透視度、SSの推移とアユの状況 (H15年)

下が出現する頻度の割には、SS25mg/L以上の日が出る頻度は多くはありません。これは、濁りをもたらす原因物質が細かい粒子であることを示しているものと思われます。

(イ) 濁りの原因物質

SSは一定量の試水をろ過し、測定しています。15年8月5～22日のSS測定に用いたろ紙のろ過後の状態を写真(巻末・写真1)に示しました。8月5日～8日までは、試水1,000mlをろ過してもろ紙は薄い緑色を呈し、汚れは少なかったのですが、8月9日には50mlを濾過しただけで大きな泥汚れがみられました。この泥汚れは8月22日以降まで続きました。この時の天竜川の濁りは、以前よく見られたような赤茶けた泥ではなく、灰緑色がかかった細かい粒子でシルト状のものからなっていました。

(ウ) 降水量との関連

河川水に濁りをもたらすのは降雨であると思われませんが、必ずしも100mm以上の降雨ばかりが長期間の濁りをもたらしているわけではなく、降雨量50mm前後のごくありふれた降雨によっても長期間の濁りがもたらされている場合が

あります。以前は10日もすれば収まっていたと思われま。しかし、天竜川では、堆砂の進行したダムにおいて、ダム機能を保ち洪水被害を防止するため、降雨時に堆砂を積極的に下流部へ流す「流砂促進事業」が平成4年頃から行なわれていて、これが濁りを大きく、また長引かせている可能性があります。

5. アユへの影響

3～5月の稚アユの遡上初期から盛期にかけては、稚アユが濁りを嫌って他の河川に逃げたり、あるいは遡上が遅れたりする可能性があります。

6～7月の初夏からの成長期には、川底の石が泥をかぶったり、あるいは濁りで石に光が届かなくなることによって、餌である珪藻が石に附着しなくなり、アユの成長が遅れる恐れがあります。また、6～8月の夏のアユ釣りシーズンには、アユの縄張り形成が弱まることが考えられます。

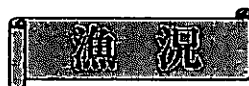
9～11月の秋の産卵期には、産卵床となる川底の石が泥をかぶり、産卵行動が抑制されたり、卵のふ化率低下やふ化した仔魚の流下状況に影

響する心配があります。

12～2月の冬期は、アユ稚魚は海で生活しているため河川水の濁りの影響は少ないものと思われませんが、12月に入ってもアユ仔魚の流下が観測される年があったり、平成13年2月27日には天竜川河口域での地引き網による採集調査で、大きさ46～88mm（標準体長）の稚アユの生息が確認されていることなどから、冬期のアユ稚魚にとっても、河川水の濁りの影響が全くないわけではありません。

第5～7図をみた限りでは、天竜川でのここ数年のアユ仔魚の成育状況は河川水の濁りの影響をかなり受けているように思われます。すなわち、次のような仮説を考えることができます。

- ・13年8月下旬～11月下旬までの長期間に及ぶ濁りが、アユの成長阻害、産卵量減少、産卵床の汚染、ふ化率の低下などをもたらし、流下仔魚数を減少させた。



平成15年の浜名湖漁獲統計

浜名漁協統計をもとに、平成15年の浜名湖内における魚種別、支所別の漁獲統計を取りまとめましたので報告します。支所別漁獲量を第1表、月別漁獲量を第2表に示しました。この中で、タコ・イカ類は近年漁獲量の増加が目立つため、本年から別々に集計し、浜名湖内で漁獲される主要魚種32種類（銘柄）について取りまとめました。

32種類の総漁獲量は3,183トンで、前年よりも343トンの減少となりました。これはほぼアサリの減少分です。アサリ以外は魚種により若干増減はありましたが、それらの総漁獲量はほぼ前年と同じでした。なお、しらす船曳などの遠州灘の漁業分と、生ノリ、カキ（一部）等湖内養殖業分を含めた平成15年の浜名漁協の総漁獲量は6,836トンで、前年より約400トン増加となりました。これは、アサリの漁獲量は減少した

- ・14年春には比較的濁りが少なかったことが、稚アユの遡上やその後の成長を促進し、ひいては秋の流下仔魚量の増加をもたらした。
- ・14年秋の多数のアユ仔魚の流下により、4月上旬までは稚アユの遡上は好調に推移したが、4月下旬～5月中旬にかけての濁りがその後の遡上を阻害した。
- ・15年7月～9月にかけての濁りが遡上後のアユの成長を阻害し、ひいては秋の流下仔魚量の減少をもたらした。

今後とも河川水の濁りに関して監視を続け、アユの遡上状況等との関連を調べるとともに、アユにとって影響の少ない「流砂促進事業」となるよう提言を行っていく必要があると考えています。

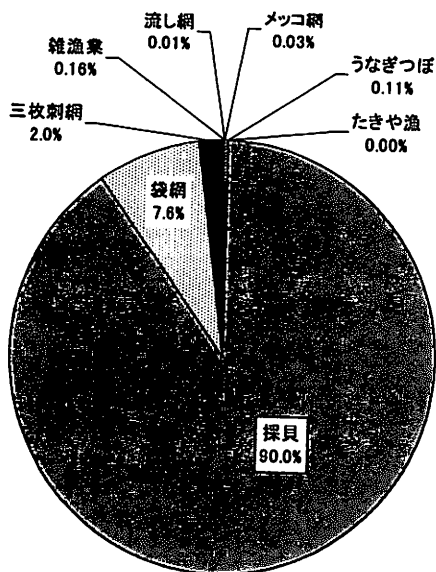
小 泉 康 二

ものの、遠州灘における主要漁獲物のシラス、カツオの漁獲量が大幅に増加したためです。養殖を除く湖内の漁業総生産量は3,207トンで、漁協全体の生産量に占める割合は約47%でした。また、漁獲金額は、漁協全体で前年よりも207百万円少ない4,104百万円、湖内漁業分は前年よりも6百万円多い1,456百万円（35%）でした。

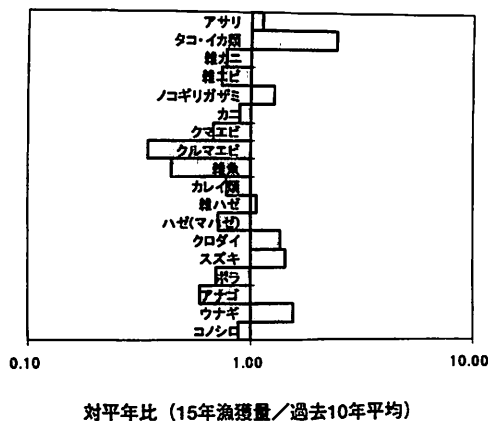
漁業種類別の漁獲量を第1図に、漁獲金額を第2図に示しました。漁獲量の比率はここ10年の状況とほぼ同様で、採貝が90.0%（2,887トン）、次いで袋網の7.6%（245トン）、刺網の2.0%（65トン）となっています。漁獲金額では採貝が71.2%（1,036百万円）、次いで袋網の18.0%（262百万円）、メッコ網の6.4%（93百万円）となっています。採貝では漁獲量は減少したものの、漁獲金額は増加しました。これは、漁獲制限サイズを大きくしたことにより、平均単価が

にタコ・イカ類は昭和40年の漁獲統計開始以降最高の漁獲量で、そのほとんどがマダコでした(本誌第505号参照)。また、ウナギも2年連続で増加していました。アサリの漁獲量は平年比1.13倍ですが、依然最盛期(昭和50年代前~中期、7~8千トン以上)の1/2~1/3と低迷しています。なお、高水準魚種ではありませんが、マイワシが平年比2.31倍漁獲されました。15年は駿河湾でも久しぶりの豊漁で、その一部が湖内にも来遊した模様です。

一方、高水準魚種のうち、平年比が低かったものは、クルマエビ(0.35倍)、雑魚(0.44倍)アナゴ(0.59倍)でした。雑魚には規格外サイズや単独集荷できない他の銘柄が含まれるた



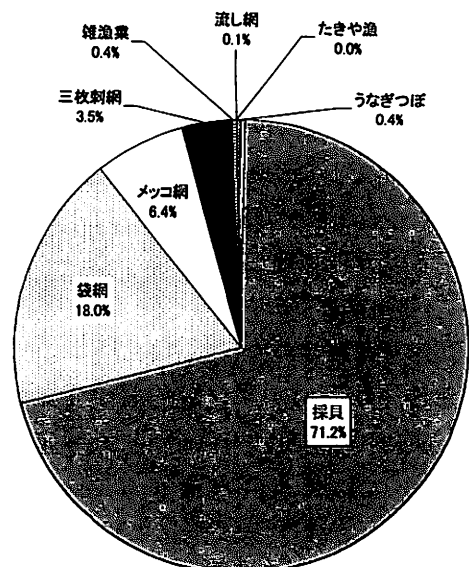
第1図 漁業種類別の漁獲量(合計3,207トン)



第3図 高漁獲水準魚種の状況

め、増減の実態は明らかではありませんが、2年連続で大幅に減少しており、近年の浜名湖の環境変化(外海水の流入増大)が影響しているものと思われます。また、タコの大発生の影響でクルマエビを筆頭に、エビ・カニ類は軒並み減少していました。しかし、唯一ノコギリガザミだけは平年比1.28倍と増加していました。これは、種苗放流の成果とノコギリガザミがマダコの嫌う河口などの低塩分域を主な生息場としているため、食害の影響がなかったためと推察されます。

以上のことから、15年の浜名湖の漁を一言で表すと「タコに振り回された一年」といえるでしょう。そして、その原因を考えると、近年顕著にみられる外海水の流入量の増大が大きな鍵ではないでしょうか。昔から浜名湖で釣りをしているという一般遊漁者の方から、15年はタチウオや40~50cmの大きなヒラメが何匹も釣れたという話が聞かれました。十数年前では考えられないような外洋性の魚が、湖内でも頻繁にみられるようになってきているようです。外海水の流入によって透明度が上がり、「きれいな浜名湖」もある意味魅力ではありますが、漁業界にとってはどうでしょう?かつての豊かな生産性を誇った浜名湖の漁場価値(環境)を回復させるために、いま何をすべきか、早急な対策が必要と思われる。



第2図 漁業種類別の漁獲金額(合計1,456百万円)

放流の効果は？ ～平成15年度トラフグ漁況結果～

小泉 康二

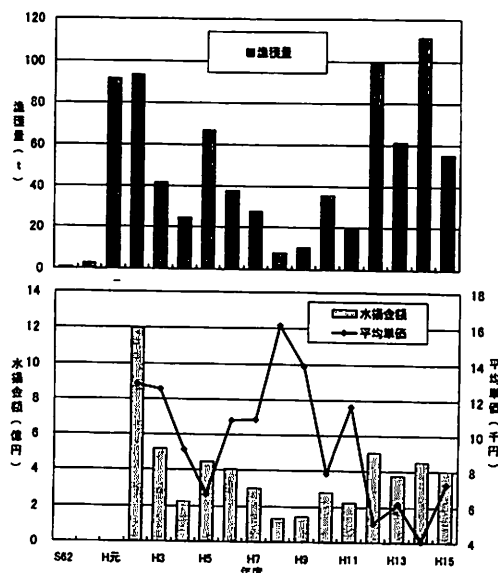
昨年10月から始まった15年度のトラフグ漁(本誌第504号参照)も、今年2月末日をもって終漁しました。漁期中、水試職員は右手に青白く光るライトを持ち、茶色のサングラスという一風変わった出立ちで市場内をうろついておりましたが、仲買いの皆さんを始め関係者の御協力を得て、放流効果等の調査を予定どおり行うことができましたので、その結果を紹介します。

遠州灘のトラフグは漁獲量の年変動が非常に激しく、平成元年以降8～112トンの範囲で推移していますが、今期は55トンでした。前年比50%であったため、一部のマスコミでは“不漁”と扱われていましたが、これは前年が過去最高だったためで、(過去10年平均)と比較すれば1.2倍で、まずまずの漁といえたのではないのでしょうか。また、平均単価が7,200円(前年比1.8倍)と大幅に上昇し堅調であったため、水揚げ金額もちょうど4億円(前年比88%、前年比1.2倍)と良好でした(第1図)。ちなみに、はえ縄漁業の漁獲量は愛知県が57.9トン(3.3億円)、三重県が56.5トン(3.7億円)で、三県ともほぼ同様な漁獲水準でした。

このような漁況のなかで、舞阪、福田、地頭方などの市場で14,437尾を調査し、692尾のイラストマー標識魚が確認されました。混獲率は平均で4.8%でしたが、漁獲時期や漁場によって差がみられたことから、放流魚と天然魚の分布に偏りがあることや、伊勢湾のトラフグが水温の低下と共に湾外に移動し、その一部が遠州灘に回遊してくることが推察されました。

確認された標識魚は、3歳魚が2尾、2歳魚が11尾、1歳魚が679尾でしたが、放流場所別にみると、伊勢湾放流群が圧倒的に多く631尾と実に91%を占め、その他は浜松市放流群45尾(7%)、静岡市放流群9尾(1%)、熊野市放流群7尾(1%)でした。

回収率は、伊勢湾放流群が6.9%であったのに対し、その他は最も高いものでも静岡市放流群の0.6%で、10分の1以下と推定されました。こ



第1図 トラフグ漁況の経年変化

れは過去2年間の結果と同様で、本県のトラフグ漁業にとっては、県内で放流するよりも伊勢湾で放流した方がより効果的であることが改めて証明されました。なお、放流魚の総回収尾数は1,700尾、回収金額は1,200万円(漁獲金額の3%)と推定されましたが、これはイラストマー標識が付いた放流魚についてのみの試算なので、無標識の放流魚を含めると、その経済効果はさらに大きいと思われます。

また、伊勢湾では小型サイズ(平均全長62～80mm)と大型サイズ(同100mm)のものを放流しましたが、その回収率にほとんど差が無く、この放流サイズの範囲では、より小型なもので十分効果が得られると示唆されました。中間育成経費を考慮すると、小型サイズの方がより経済的であり有利であるといえます。16年度は伊勢湾において更に放流種苗の小型化を目指し、中間育成を必要としないサイズでの直接放流試験を予定しています。

さらに、本誌第505号でも紹介したALC調査では、619尾分の耳石が採集され、そのうちの3尾で標識が確認されました。その結果、非常に大ざっぱな推定で、回収率は0.33～0.40%と試算されました。この放流群の放流サイズは40cmで、同年におよそ70～90mmで県内に放流したイ

ラストマー標識魚（静岡市群・浜松市群）の回収率と比べても大きな差はみられず、放流サイズを考える上でとても貴重な結果を得ることができました。サンプルを提供していただいた「ふぐ料理専門店」神谷氏に、改めてお礼を申し上げます。

今期は、過去に例がないほど2歳魚の占める割合が極めて高く、その状況が終漁まで続いたので、16年度漁期は、この2歳魚が3歳魚として

どれだけ捕れるか楽しみです。しかし一方で、例年漁獲主体となる1歳魚の資源量は、今期の伊勢湾における小型底曳網の漁模様からみて過去最低と噂されていますので、総漁獲量としてはかなり厳しい状況が予想されます。限りある資源を有効に利用するためにも、10月中の禁漁や操業日数の制限など思い切った対策を検討する必要があるかもしれません。

平成15年度シラスウナギの採捕結果

飯 沼 紀 雄

平成15年度（15年12月～16年4月まで）における県内のシラスウナギの採捕量は第1表のようになりました。

15年度の月別採捕量を過去10か年（5～14年度）の平均値（カッコ内）と比較すると、12月（295kg）144%、1月（520kg）151%、2月（598kg）188%、3月（545kg）137%、4月（161kg）9%と、全般的に採捕量が増加しました。4月は例年の1割以下の採捕量となりましたが、これは採捕が浜名湖内では3月17日、天竜川河口では3月26日、大井川から菊川では4月2日で終了したためです。

また、地域別に採捕量を14年度（14年12月～15年4月）と比較すると、富士市から榛原町までは73%（14年度117kg）、相良町から御前崎町までは56%（同241kg）、浜岡町から天竜川までは114%（同1,048kg）、浜名湖は128%（同1,313kg）でした。各地区の採捕量は、御前崎町より東部では減少し、浜岡町より西部、特に浜

名湖では増加しました。15年度の総採捕量は約3,095kgで、14年度（約2,720kg）よりも約14%上回りました。

14年度は、漁初めから全国的に採捕量が多く、価格が安かったこと及びそれまで低迷していた成鯿価格が持ち直したことから池入れ量は増加しました。相場は12月の1kg当たり約15万円から始まりましたが、採捕量が多かったため、15年3月には約7万円まで下落しました。一方、15年度は、漁初めは本県を始め全国的に漁模様が悪かったのですが、12月下旬の闇の大潮から採捕量が伸び、結果的に過去10年平均値より12月の採捕量は約40%上回りました。しかし、14年12月（731kg）に比べると本年はその58%に過ぎないため、多くの人は今年の採捕量は少なく感じられたのではないのでしょうか。そのためか、15年度のシラスウナギの相場は20～30万円まで推移し、例年並かそれ以上に採捕があった本県においても価格が高止まりした感じがありました。

第1表 平成15年度シラスウナギの採捕量結果

地 域	年 月	平成15年					合 計
		12月	1月	2月	3月	4月	
富士市～榛原町	上旬	1,091	2,412	12,792	13,322	3,898	33,515
	下旬	2,273	9,980	29,366	10,491	0	52,110
	小計	3,364	12,392	42,158	23,813	3,898	85,625
相良町～御前崎町	上旬	0	3,349	13,089	19,170	4,382	39,990
	下旬	13,188	18,493	42,514	20,944	0	95,139
	小計	13,188	21,842	55,603	40,114	4,382	135,129
浜岡町～天竜川	上旬	34,543	35,380	98,460	93,960	6,805	269,148
	下旬	186,648	191,804	291,303	253,211	0	922,966
	小計	221,191	227,184	389,763	347,171	6,805	1,192,114
浜名湖	上旬	57,233	150,614	174,410	293,084	0	675,341
	下旬	130,414	371,244	464,990	40,136	0	1,006,784
	小計	187,647	521,858	639,400	333,220	0	1,682,125
県全域	上旬	92,867	191,755	298,751	419,536	15,085	1,017,994
	下旬	332,523	591,521	828,173	324,782	0	2,076,999
	小計	425,390	783,276	1,126,924	744,318	15,085	3,094,993

ウナギ及びアユ養殖における魚病被害状況（平成15年）

吉 川 昌 之

平成15年（1～12月）のウナギ及びアユ養殖における魚病被害状況を把握するために、県内の養殖業者の協力を得てアンケート調査を実施しましたので、その結果についてお知らせします。

1. 生産状況

平成4年から14年までの農林水産統計から抜粋した生産統計と、15年のアンケート調査結果から推定した生産状況を第1表に示しました。なお、平成15年の経営体数は当分場で把握できた実働経営体数で、同時に、アンケートの調査実施対象経営体数でもあります。

ウナギ養殖の経営体数については、農林水産統計の数字は当分場で把握している数字よりも多くなる傾向があります。14年に当分場で把握していた数字は59軒でしたから、15年には3軒減少したことになり、微減と言えます。なお、農林水産統計と当分場で把握している数字の差

は、当分場が実働経営体としているのに対し、農林水産統計は休業している経営体も数えているためではないかと思われます。

ウナギの生産量は平成4年以降減少が続いています。15年の推定値は2,000トンを超えています。15年の推定値は農林水産統計の値より多くなる傾向があり、昨年（14年）の調査時の推定値も2,000トンを超えていたのに、農林水産統計では2,000トンを超えていたことから、15年も2,000トン前後の値ではないかと思われます。生産金額はほぼ前年並で、単価は百円強下落しました。12～13年よりは高い値を維持していますが、それ以前に比べると大きく下落したままとなっています。

アユ養殖の経営体数については、15年に休業したところが2軒ありました。農林水産統計の数字には、ウナギ養殖と同様休業中の経営体や、他にオトリアユ店なども含まれていると考

第1表 ウナギ及びアユの養殖生産状況

年	ウ ナ ギ				ア ユ			
	経営体数	生産量 t	生産額 百万円	単 価 円/k g	経営体数	生産量 t	生産額 百万円	単 価 円/k g
4	183	5,263	8,395	1,595	26	1,020	1,418	1,390
5	167	5,014	8,870	1,769	28	795	1,185	1,490
6	159	4,599	9,198	2,000	26	775	1,071	1,382
7	132	4,123	8,870	1,952	27	785	993	1,267
8	124	3,940	8,168	2,073	27	791	1,244	1,537
9	117	3,539	6,420	1,814	27	917	1,649	1,798
10	101	2,775	5,400	1,946	26	747	1,158	1,458
11	94	2,664	3,655	1,642	26	567	779	1,374
12	84	2,590	2,947	1,137	24	618	702	1,136
13	77	1,998	2,108	1,055	25	498	559	1,122
14	66	1,961	2,738	1,396	25	488	617	1,264
15	56	2,181	2,797	1,282	12	434	579	1,333

平成4～14年：農林統計

平成15年：独自調査（調査票回答率：ウナギ68%、アユ100%、ウナギの数値は、調査により得た数値を回答率で除し全県値を推定したもの。以下の表においても同様）

えられます。実働養殖経営体数は、14年の14軒から、15年は12軒に減少したことになります。

アユ養殖の生産量は、休廃業したうちの一つが大手の生産者であったため、前年より大きく減少しました。それにより生産額も減少しましたが、単価は前年に引き続き上昇し、11年のレベルまで回復してきました。

2. 魚病発生被害状況

平成4～15年の魚病被害状況を第2表、平成14、15年の疾病別被害量を第3表に示しました。

ウナギ養殖における平成15年の被害量及び被害金額はともに前年に比べ減少し、被害量の生産量に対する割合は6.8%となりました。疾病別の被害量では、例年最も被害の大きいウイルス性血管内皮壊死症は、前年の54トンから44トンと、10トン減少しました。また、パラコロ病も、29トンから25トンと、4トン減少しました。一方、点状出血症と板状出血症を合わせた被害量は、33トンから39トンと、6トン増加し、骨曲がりも、30トンから33トンと、3トン増加しました。

アユ養殖では前年に引き続き被害が増加しま

した。疾病別の被害量では、例年被害の大きい冷水病が、15年はとくに大きな被害をもたらし、14トンから32トンと、2.3倍に増加しました。また、ピブリオ病が、前年の40kgから1,070kgとなり、冷水病に比べるとまだレベルは低いものの、割合で見ると大きく増加しました。ピブリオ病のワクチンが生産されなくなってからすでに数年が経過していますが、これによりピブリオ病が再興してきたのでなければいいのですが。一方、一時期大きな被害を生じていたシュードモナス病は、15年には被害はなかったようです。本疾病を発症しやすい傾向のある琵琶湖産種苗の導入を控える生産者が多くなったことによるものと考えられます。

3. 水産用医薬品の使用状況

平成7～15年の水産用医薬品の使用状況を第4、5表に示しました。

ウナギ養殖（第4表）では、13年以降抗菌剤の使用量は大きく減少し続けています。使用金額も15年は減少しましたが、使用量の減少に比べると、減少の割合が小さくなっています。これは、ウナギへの薬剤残留の問題から、残留の

第2表 魚病被害の経年変化

年	ウナギ		アユ	
	被害量; t (被害割合%)	被害額; 百万円 (被害割合%)	被害量; t (被害割合%)	被害額; 百万円 (被害割合%)
4	436.5 (8.3)	657.0 (7.8)	50.6 (5.0)	71.9 (5.1)
5	334.7 (6.7)	583.6 (6.6)	33.6 (4.2)	41.3 (3.5)
6	289.5 (6.3)	573.7 (6.2)	12.4 (1.6)	36.2 (3.4)
7	227.0 (5.5)	550.5 (6.2)	52.1 (6.6)	84.0 (8.5)
8	211.8 (5.4)	378.7 (4.6)	32.4 (4.1)	79.7 (6.4)
9	166.6 (4.7)	566.5 (8.8)	43.7 (4.8)	147.4 (8.9)
10	143.5 (5.2)	288.4 (5.3)	58.3 (7.8)	156.6 (13.5)
11	158.1 (5.9)	229.4 (6.3)	51.0 (9.0)	133.1 (17.1)
12	177.0 (6.8)	202.0 (6.9)	56.4 (9.1)	63.4 (9.0)
13	129.4 (6.5)	110.0 (5.2)	25.3 (5.1)	46.4 (8.3)
14	163.4 (8.3)	188.0 (6.9)	29.7 (6.1)	50.4 (8.2)
15	148.3 (6.8)	179.2 (6.4)	36.4 (8.3)	59.7 (10.3)

平成15年調査票回答率:ウナギ70%、アユ100%

被害割合とは、それぞれ生産量あるいは生産額に対する割合

心配のないフロルフェニコールへシフトしているためと考えられます。フロルフェニコールは残留性ではきわめて優れているのですが、単価が高いのです。

アユ養殖では（第5表）、前年に比べ使用量及び使用金額とも大きく減少しました。魚病被害、特に冷水病の被害が大きかったにもかかわらず

ず、医薬品の使用が少なかったということについては、薬を使わなかったため被害が大きくなったのか、あるいは、冷水病では医薬品が効かないことがままあるため、「どうせ使っても無駄だ」ということで使用されなかったのか、そのところははっきりしません。

第3表 平成14年及び15年の疾病別被害量

ウナギ			アユ		
病名	H14	H15	病名	H14	H15
ウイルス性血管内皮壊死症	53,573	43,997	ビブリオ病	40	1,070
点状出血症	632	6,930	冷水病	14,200	32,300
板状出血症	32,731	31,662	シュードモナス病	7,100	0
カラムナリス病	2,557	2,369	細菌性鰓病	100	1,000
滑走細菌性鰓病	1,686	2,154	真菌性肉芽腫症	5,000	0
パラコロボ	29,289	24,719	ミズカビ病	0	300
寄生虫病	1,686	287	グルゲア病	2,000	100
骨曲がり	29,626	32,944	ギロダクチルス病	0	100
その他	0	0	その他	0	0
不明	11,660	3,805	不明	1,300	1,500
合計	163,440	148,327	合計	29,740	36,370

平成15年調査票回答率:ウナギ70%、アユ100%

第4表 水産用医薬品の使用状況の経年変化（ウナギ）

年	使用量 (kg)					使用金額 (千円)				
	抗生物質	合成抗菌剤	サルファ剤	駆虫剤	合計	抗生物質	合成抗菌剤	サルファ剤	駆虫剤	合計
7		3,178		173	3,351		32,443		505	32,948
8		2,975		175	3,180		33,885		502	34,387
9		2,855		713	3,568		30,842		943	32,939
10		1,510		27	1,537		12,207		82	12,289
11		1,409		99	1,509		13,559		296	13,855
12		1,751		38	1,790		15,318		98	15,416
13		839		44	882		7,169		111	7,280
14	170	545	10	29	754	582	6,477	239	86	7,383
15	123	320	13	15	471	464	5,243	333	46	6,086

平成15年調査票回答率:71%

第5表 水産用医薬品の使用状況の経年変化（アユ）

年	使用量 (kg)			使用金額 (千円)		
	合成抗菌剤	サルファ剤	合計	合成抗菌剤	サルファ剤	合計
7	416			5,544		
8	378			3,851		
9	550			8,402		
10	1,072			16,731		
11	1,195			16,499		
12	723			6,620		
13	416			2,915		
14	70	532	601	939	7,997	8,936
15	55	153	208	708	2,191	2,897

平成15年調査票回答率:75%

普及のひろば

岡山県における漁場改良の試み ～平成15年度巡回教室講演～

上村 信夫

3月9日に当场研修室において巡回教室が行なわれました。岡山県水産試験場特別研究員の福田富男先生に講師としておいで頂き、「岡山県における漁場改良の試み（アマモ場造成、カキ殻魚礁を通して）」という題目で講演していただきました。受講者は浜名漁業協同組合員を中心に約80名でした。

瀬戸内海で昭和50年頃から激減したアマモを復活させるための岡山県水産試験場における研究、その成果を基にアマモ場造成に取り組んだ岡山県日生町漁協の活動、そして、日生町漁協によるアマモ場造成の成果を受けての「海洋牧場構想」などについて紹介頂きました。

最近漁獲量が減少傾向にある浜名湖の漁業生産回復を考えるうえで大変参考になりました。講演要旨を以下に紹介します（上村要約）。

講演要旨

I アマモ場造成を始めた時期と動機

- ・ 昭和初期から戦後にかけて、沿岸はアマモやガラモが密生し、槽でこがなければ



[写真] 講演風景

航行できない場所も多く、当然海の環境も良好で漁獲も多かった。

- ・ 瀬戸内海では昭和50年頃からアマモの減少や環境の変化によって次第に漁獲が減少してきた。
- ・ 岡山県水産試験場では昭和54年からアマモ場造成試験の研究を行ってきた。
- ・ 一応の成果があって、使えそうな結果について新聞に発表したところ、日生町漁協の定置網組や青年部の皆さんが中心になってアマモ場造成を開始した（昭和60年）。

- ・ 岡山県では大正年代に4,300haあったアマモ場が昭和57年には500～600haに減ってしまっていて現在に至っている。
- ・ 海が浅いため多くは干拓されてアマモ場が減った。
- ・ 一方、日生町では、埋立てがなくアマモ場が減っていて、埋立て以外の減少要因があるのではないかと考えられた。

II アマモ植物体の構造、生活史

- ・ アマモには、12～2月に種から発芽、2～6月に伸長、3～6月に花枝を形成、花穂に種子をつけた後に枯死していく1年生アマモ（浜名湖では春モクと呼ばれ、湖北部に分布しているもの）と、植物体が2～6月に成長、7～9月に衰退、11月に植物体はほとんどなくなるが地下茎が残って12月に再び成長する多年生アマモ（浜名湖ではオオベラと呼ばれ湖南分に分布しているもの）がある。

III アマモの移植方法

- ・ アマモを移植する方法としては、アマモの草体に底の泥をつけた移植方法と泥をつけない移植方法とがある。
- ・ 岡山では種子を播種する方法を採用している。

IV アマモの種子の採取方法

- ・ 6月に花枝を取る。
- ・ 花枝を網いけすなどに入れておく。
- ・ 7～8月になると次第に花枝部分は枯死分解して、種子は網の中にたまる。
- ・ 8月に取り上げ、タルの中などでゴミ等を取り除く。
- ・ 種子を入れた網いけすをカキ筏などに吊るして保存する。

V アマモの播種方法

- ・ 潜水して播種するときには巾着袋のような袋を使う。
- ・ 底の部分に5mm目位のモジ網を張っておき、播種したいところで袋をゆすると種子が落ちて行く。
- ・ 場所にもよるが、無理に潜水して播種する必要はなく、播種は船の上からでも十

分効果がある。

VI 反響

- ・ 試験場での試験結果を新聞社に出したら大きな反響を呼び、いろんな報道機関やアマモの研究者が話を聞きにきた。
- ・ アマモ場の造成面積が50m×50m=2,500㎡であったということが大きかった。
- ・ たいした元手はいらぬということで、日生町漁協で実際に取り組み始めた。
- ・ その結果、最終的に米子湾で7haのアマモ場を再生した。
- ・ このことが再び報告されて、漁業者による7haのアマモ場再生は全国的にも例がないとして大反響を呼んだ。

VII ベルデマット法の開発、カキ殻の利用

- ・ 一方、種をまいただけでは種がなくなってしまっていて再生しない場所が結構あることが分かった。
- ・ そこで、種をマットにいれて埋める方法を考えた。
- ・ すると、マットを入れた部分は確実に濃密に生えるが、案外、マットの上からは出ていかないことが判明した。
- ・ 岡山県の海はヘドロがふわふわしていて、底質が悪いことが原因らしい。
- ・ また、昔カキ筏を設置していて、底にカキ殻が堆積していた現寺湾では、たいした手もかけないでアマモが再生した。
- ・ そこで、海底にカキ殻をまき、しっかりした底質とすることを考えた。

VIII 浅海域緑化技術開発事業

- ・ 一連の成果が評価され、全国規模で「浅海域緑化技術開発事業」が平成9～13年に行なわれた。
- ・ この中で、物理的環境からのアマモ場造成適地条件が明らかにされた。
- ・ また、アマモ場造成のイメージが出来た。
- ・ つまり、まず沖に波を消すための消波施設を作る。
- ・ その内側の深い所は光が不足するのでかさあげをする。
- ・ そして、そこにはカキ殻と砂を入れる。

- ・ そこにアマモの種子をまく。

IX 海洋牧場構想

- ・ 一連の成果を総合した形で、日生の沖合いに県下で最大の海洋牧場計画（東備地区広域漁場整備事業、平成13～21年）が確定し、今後への期待が高まっている。
- ・ アマモ場造成とカキ殻魚礁が特徴的といえる。

- ・ 成功裡に事業を展開し、全国の模範となるべく関係者一同努力を継続している。

X 藻場造成事業成功へのかぎ

- ・ 環境や藻場を守っていくことを、漁業者自らが自分達の問題として自覚し、色々な形で参加していかない限り、事業の成功はあり得ない。

アオノリの天敵を味方に・・・

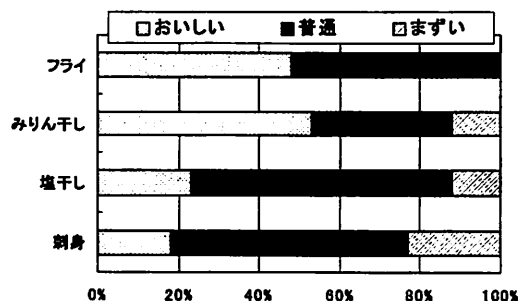
小泉 康二

どこかで、聞いたことがあるようなフレーズですが…、アサリの天敵「ツメタガイ」の駆除に関する浜名漁協女性部の活動は、本誌（第503、505号）のみならずTVや新聞などのマスコミに何度も取り上げられ非常に有名になりましたが、今回はその第2弾（と思っているのは著者だけ？）の紹介です。

本誌505号で「シャクにさわる話」という表題で、アイゴによる養殖ノリの食害について紹介しましたが、それを讀んだ漁業者の方から、「浜名湖ではアイゴを食べる習慣がないから嫌われ者だけど、料理法を紹介してみたら如何ですか？」と貴重なご意見をいただきました。実は、著者は以前アイゴの魚食普及に挑戦したことがありましたので、その結果を経緯も交えて紹介します。

県中部の榛南地区（御前崎町～相良町地先）では、十数年前からサガラメやカジメなどの大型海藻が消失する「磯焼け」が発生し、水試の調査の結果、アイゴの食害がその原因や回復の妨げの最も大きい要因の一つであることが分かりました。しかし、アイゴは「ネションベン」と呼ばれるほど独特のアンモニア臭が強く、また鰾に毒腺を持っていることなどから、県内ではほとんど食べる習慣がなく、定置網などでは1日数百kg単位で漁獲（混獲）されるにも関わらず、捨てるだけという状況でした。そこで、アイゴが食卓に上がるようになれば、漁獲対象魚として漁業者の収入になり、また海藻にとっても害敵駆除となり、一石二鳥と考え、魚食普及に取り組みました。

調べてみると、大阪や和歌山などの関西地区



第1図 アイゴの試食結果

や沖縄（稚魚の塩辛「スクガラス」は特産品として有名）などでは、一般的に食べる習慣があり、刺身を始め干物や煮付けなどごく普通の家庭料理として利用していました。そこで、刺身（皮なし）、干物（皮付き（塩、ミリン））、フライ（皮なし）を作り、水試職員や漁業者、漁協関係者などを対象に試食会を行いました。それぞれ、におい、味、食感、総合評価をしてもらいましたが、今回は総合評価だけを紹介すると第1図のとおりでした。予想以上の好結果で、フライやミリン干しについては半数の人が「おいしい」と答え、干物や刺身が「まずい」と答えた人も約1～2割と少数でした。「まずい」理由はやはりにおいが気になったようですが、調味料や香辛料を工夫すれば十分クリアーできる問題です。また、刺身も後日鮮度管理に工夫をして調理すると、においも殆どなく「マダイ」と間違えるほど、美味でした。

これならということで、あらためて漁業者の方々と話をしたところ、おいしく食べられることは認めたものの、においへの嫌悪感以上に、鰾に毒があり刺されるととても痛いという恐怖心が、思わぬ障害となりました。著者自身調査

で千尾以上の魚を扱いましたが、幸いにも刺されなかったのも、その「痛み」は理解できませんし、ちょっと大袈裟ではと思いましたが、「2、3日は痛くて仕事にならない」と真剣に話される漁業者を前に、それ以上話を進めることはできませんでした。

浜名湖では、袋網で漁獲されたものがごく一部は流通していますが、冒頭のとおり一般的ではありません。しかし、試食試験の結果が示すとおり、食材としては全く問題はないと思います。普及するには榛南地区のように鯖の毒について不安はありますが、対策は「魚の扱いに気を付ける」ことで十分でしょう。

調理方法の紹介ということでしたが、ここでは具体的なものは紹介しません。というのも、淡泊な白身なので、どんな料理にも合うからです。味付けも、各家庭の好みで良いのではないのでしょうか。個人的にはフライや煮付けが薦

めです。インターネットで調べてみると、意外にもアイゴ料理を紹介したものは多く、例えば「アイゴ(バリ)釣り専科」というHPでは調理のポイントが非常に分かりやすく掲載されています。

ツメタガイに続く第2弾として、アイゴ料理を浜名湖の特産にしてみませんか? 「くさい魚」という固定観念にとらわれず、皆さんも是非一度ご賞味あれ!

【特徴と調理のポイント】

- ・白身で淡泊。夏期は産卵期のため、脂が少ない。加熱すると身離れが非常に良い。
- ・背、尻、腹鰭に毒腺があるので、先ず料理ハサミ等で切り落とす。
- ・刺身にする場合は、出来るだけ新鮮なうちに氷水で冷やしておく。
- ・皮をはいで利用すると、よりにおいが気にならない。

ひとこと

混入物があってもアオノリが好き!

松浦玲子

浜名湖分場に勤める前は、板ノリといえば勿論「クロノリ!」、おでんにカツオブシ粉とアオノリ粉をまぶす「静岡おでん」方式も苦手と、アオノリとは接点のない暮らしをしていましたが、ここに来たことで随分アオノリを食べるようになりました。

最初のうちは「アオノリは浜名湖周辺の人々にとってどうやら重要な食品らしい。」という印象を受けたものの「クロノリの方が美味しいのでは?」と半信半疑でした。そこで、ものは試しと地元の方に料理を教えてください、お吸い物、佃煮、酢の物、混ぜご飯と試してみたら、これがとても美味しい。次第にアオノリの魅力に取りつかれ、今ではお世辞抜きですっかりアオノリ派となってしまいました。

ただ、浜名湖のアオノリには混入物があり、地元の人がそんなものよと心得ている一方で慣れない人を驚かせます。ノリは他の生き物のす

みかになっているため収穫する時に混じってしまうのです。当然、養殖業者の方々は混入物を取り除く努力をされています。しかしノリと大きさの変らない生き物すべてを除去するには限界があり、板ノリにはヨコエビが、生ノリにはアマモの葉っぱが入っている、ということが時々あります。

近頃は、食品に他の生き物が混じることは過剰なまでに許されなくなっているようで、今期もノリの混入物に関する問合せや苦情がありました。ノリに混じってしまう生き物について、消費者から「こんなの入ってたけど!?!」と苦情があったと聞くと、やるせなくなります。本当は、私だってノリに混じっている無脊椎動物が苦手です。ですが、この生き物はノリの中にすんでいたのだなあ、と思えば仕方がない受け入れられるか、という気にもなるのですが、いかがでしょうか。逆に、他の生き物もすすめないノリが

あったら嫌だな、そんなノリこそ食べても良いのかな…と思っています。

水産製品の中にある「誤って口にしても問題

ない異物」に神経質になるのはやめて、もう少しおおらかに受けとめて欲しい、と願うのでした。

紹介

平成16年度人事異動及び業務分担

4月1日付け人事異動が行なわれ、当分場では次のような異動がありました。

【転出】

幡谷雅之（分場長）→水産試験場漁業開発部
（部長）

後藤裕康（主任研究員）→栽培漁業センター
（主任研究員）

幸田良隆（主事）→総務部福利厚生室（副主任）

【転入】

影山佳之（分場長）←水産試験場漁業開発部
（研究主幹）

影山浩一（主任）←磐田財務事務所（副主任）

佐藤孝幸（技師）←水産振興室（技師）

幡谷分場長は2年間、分場業務の総括のかたわら、水産試験場百年史の編纂、移転間もない新分場、体験学習施設ウォットの運営円滑化に精力的に携わってこられました。

後藤主任研究員は3年間、浅海漁業全般、ガザミ栽培漁業研究、アサリ資源管理研究等に多大な貢献をされました。

幸田主事は3年間、分場の雑多な庶務に加え、移転間もない新分場、体験学習施設ウォットの運営円滑化のため多大な貢献をされました。

皆様方の今後のご活躍をお祈りいたします。

業務分担は下表のとおりです。

平成16年度浜名湖分場業務分担表（要約）

職	氏名	主な担当業務
分場長	影山佳之	分場業務の統括
主任	影山浩一	予算、庶務
研究主幹	上村信夫	試験研究の企画調整、淡水養殖全般、普及・広報の統括
主任研究員	吉川昌之	淡水養殖全般、魚病、アユ養殖
副主任	小泉康二	浅海漁業全般、トラフグ栽培漁業
副主任	鷺山裕史	アサリ資源管理、浜名湖の環境保全
副主任	飯沼紀雄	ウナギ養殖
技師	松浦玲子	貝毒、漁場環境
技師	佐藤孝幸	ガザミ栽培漁業、ノリ・カキ養殖
非常勤	和久田昌勇	調査船の運行管理
非常勤	内村光男	試験研究の補助

【転入者自己紹介】

影山浩一 主任

この度の異動により、磐田財務事務所より浜名湖分場の配属になりました。

浜名湖分場の庶務を担当することになります。が、研究員の方たちの補助ができるよう尽力していきたいと思っていますので、よろしく願います。



佐藤孝幸 技師

県庁水産振興室から異動となりました佐藤孝幸と申します。ガザミの栽培漁業及びノリ・カキ養殖を主に担当することとなりました。

浜松市で生まれ育ちながら、浜名湖を訪れることは年に数回のレジャーのみでほとんど浜名湖を知りません。高校生のとき部活動で佐鳴湖と浜名湖の水質調査を行っていた頃に浜名湖分場の存在を知り、将来はここで働けたらと思い続けておりましたが、その夢が今回の異動で叶った形となりました。

浜名湖のこと、水産業のこと、勉強していか

なければならぬことは多々ありますが、精一杯努力して参りますので、御指導御鞭撻のほどよろしくお願い致します。



分場日誌 (平成16年2月～16年4月)

16年2月

- 2日 漁業士認定式 (静岡)
- 5日 志太榛原県行政センター地域行政連絡会議一行視察 (当場)
- 5日 研究報告編集委員会 (本場)
- 5～6日 浜名湖水産振興協議会視察 (三重県)
- 9日 業務連絡会議・分場長会議(本場)
- 10日 湖内定点観測
- 13日 漁業士会総会 (静岡)
- 17～18日 資源増大技術開発事業帰郷型回遊性種 (トラフグ) 検討会 (名古屋)
- 16日 水産基本政策プログラム検討会 (本場)
- 17日 持続的養殖生産確保法に基づくコイ処分指導 (富士)
- 19日 漁場環境保全関係試験研究推進会議 (広島)
- 19～20日 アユ資源研究部会 (東京)
- 20日 産業財産権セミナー (静岡)
- 26日 知事と語る会 (浜松)
- 26日 沿岸漁業改善資金推進会議 (東京)
- 27日 普及員一般研修 (本場)

16年3月

- 1日 ウナギ種苗生産総合技術開発検討会 (東京)
- 2日 水産基本政策プログラム検討会 (静岡)
- 3日 アユ冷水病対策協議会全体会議 (東京)
- 3日 技術連絡協議会 (栽培センター)
- 3日 舞阪町ボランティア連絡協議会〈講演〉 (舞阪町)
- 3～4日 青年・女性漁業者交流大会 (東京)
- 5日 業務連絡会議・分場長会議(本場)
- 5日 研究報告編集委員会 (本場)
- 5日 沿岸漁業改善資金県協議会 (静岡)
- 8日 H17プロジェクト研究プレゼンテーション (本場)
- 9日 湖内定点観測
- 9日 巡回教室「岡山県における漁場造成の試み」(舞阪)
- 9日 知事と語る会 (浜松)
- 10日 魚病対策委員会技術部会 (静岡)
- 16～17日 赤潮貝毒被害防止対策総合検討会 (東京)
- 17日 水産振興審議会 (静岡)
- 17日 アユ魚病講習会 (舞阪)
- 17日 鮎養殖組合総会 (舞阪)
- 18日 水産・栽培漁業専門部会 (本場)
- 18日 全国養殖衛生管理体制推進会議 (東京)

- 22日 アユ冷水病対策協議会・魚病対策委員会 (静岡)
- 24日 深層水水産利用施設開所式 (焼津)
- 26日 第2回アサリ全国協議会 (東京)
- 26日 KHV講演会 (大阪)
- 31日 県養鰻協会役員・幹事・企画委員合同会議 (静岡)

- 16日 漁業士会西部支部会 (当時)
- 16日 普及推進会議 (本場)
- 19日 雄踏公舎取壊し打合せ (当時)
- 20日 河川漁協役員監視員研修会 (静岡)
- 22日 西部地域行政連絡会議 (浜松)
- 22日 浜名湖をきれいにする会総会 (引佐)
- 22日 水産資源ブランド・ニッポン事業担当者会議 (本場)
- 23日 水産事業概要説明会 (静岡)
- 23日 三遠南信気象研究会 (浜松)
- 23日 松食い虫防除推進連絡会 (浜松)
- 23日 河川漁協役員監視員研修会 (大仁)
- 26日 アサリ資源全国協議会太平洋ブロック会議 (横浜)
- 26日 資源管理型漁業関係事業担当者会議 (本場)
- 30日 青鰻会勉強会 (浜松)

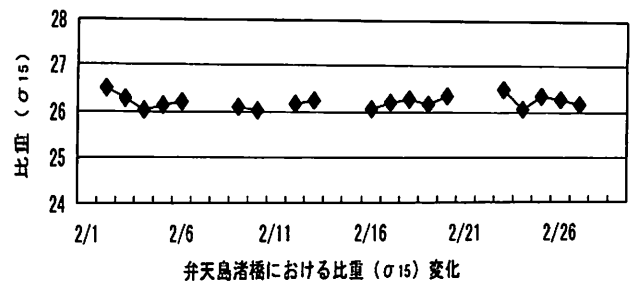
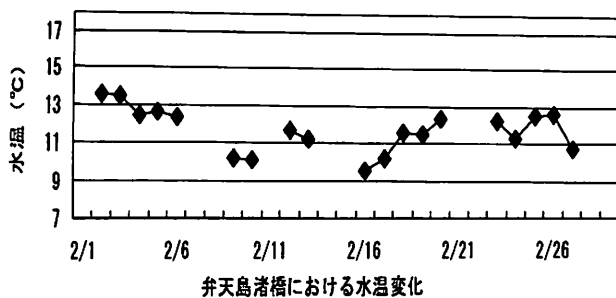
16年4月

- 5日 辞令交付 (本場)
- 7日 浙江省農業庁一行来場
- 9日 業務連絡会議・分場長会議 (本場)
- 10日 浜名漁協水産祭 (舞阪)
- 13日 浜名漁協水産祭 (鷺津)
- 14日 湖内定点観測
- 16日 河川漁協役員監視員研修会 (天竜)
- 16日 ウォット管理運営委員会 (当時)

弁天島の気象海況 (平成16年2月～16年4月)

	上旬	中旬	下旬	月平均
水温(°C)	12.1	11.1	11.9	11.7
比重(σ_{15})	26.18	26.21	26.26	26.21

天気	○	①	◎	●
日数	10	11	7	1

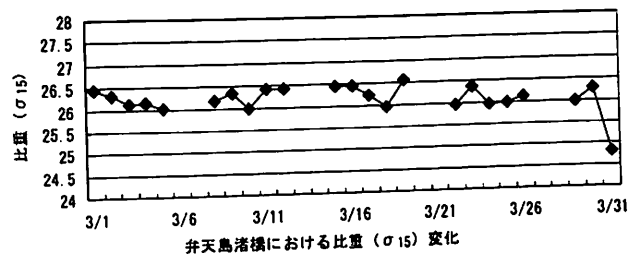
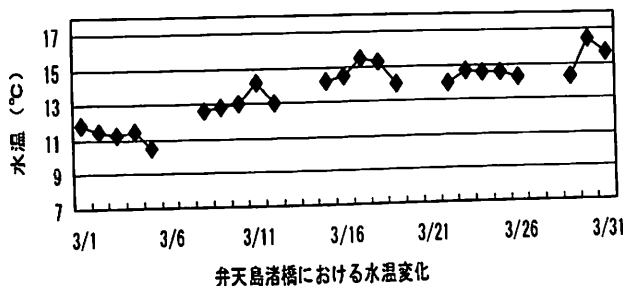


平成16年2月 水温

平成15年2月 塩分

	上旬	中旬	下旬	月平均
水温(°C)	11.9	14.4	14.8	13.7
比重(σ_{15})	26.19	26.36	25.94	26.15

天気	○	①	◎	●
日数	11	8	10	2

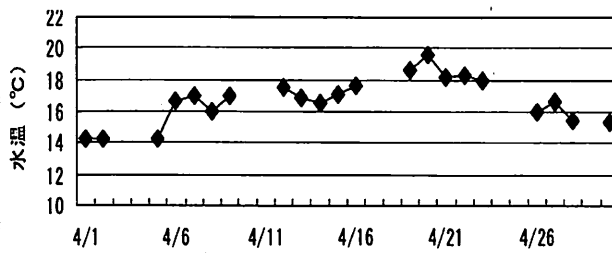


平成16年3月 水温

平成16年3月 塩分

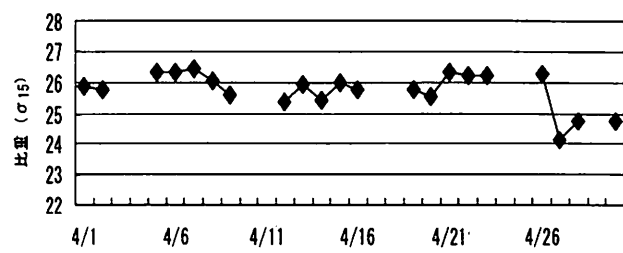
	上旬	中旬	下旬	月平均
水温(°C)	15.9	17.7	16.9	16.9
比重(σ_{15})	26.08	25.68	25.52	25.74

天気	○	①	◎	●
日数	13	9	4	4



弁天島渚橋における水温変化

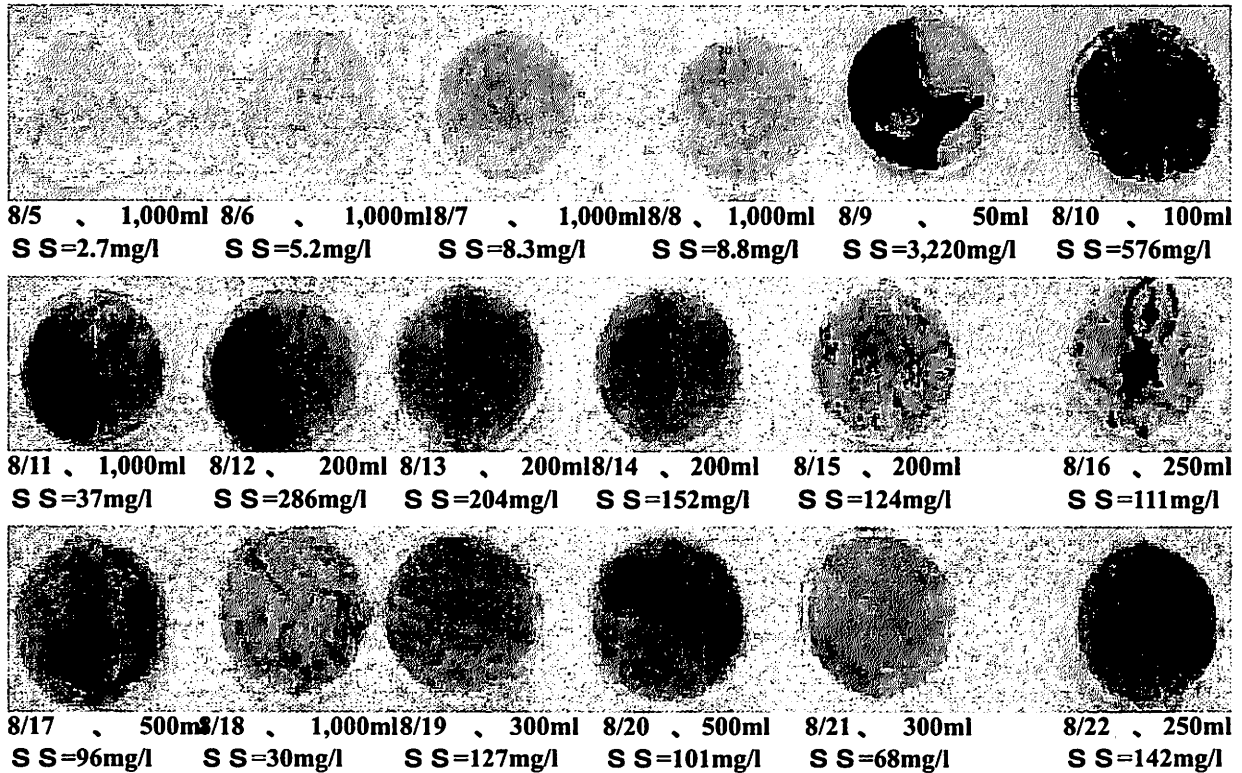
平成16年4月 水温



弁天島渚橋における比重 (σ_{15}) 変化

平成16年4月 塩分

【編集後記】最近、息子(小3)の少年野球に駆り出され、丸1日野球をする週末を過ごしています。キャッチボールの相手やノックの球拾いなどの雑用ですが、翌日は筋肉痛と“気怠さ”のなか目覚めます。県庁時代と違い、現場仕事が多い水試に戻り、随分と体力は回復したつもりでしたが…。しかし、漁業現場では還暦を過ぎた方々が、現役として「バリバリに」頑張っています。自分ももっと現場をまわり、知識とともに体力を身につけてはと感じる今日この頃です。



【写真1】平成15年8月5日～22日までのSS測定用紙(本文6ページ)